

ハビトウスの共鳴：身体的相互作用と性向
の現働化

SUZUKI, Tomoyuki / 鈴木, 智之

(出版者 / Publisher)

法政大学社会学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

社会志林 / 社会志林

(巻 / Volume)

61

(号 / Number)

4

(開始ページ / Start Page)

129

(終了ページ / End Page)

149

(発行年 / Year)

2015-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00021189>

ハビトゥスの共鳴

——身体的相互作用と性向の現働化——

鈴木 智 之

1. はじめに——性向はいかにして現働化するか

B. ライールによるブルデュー社会学の批判的継承の試みは、探求を導く問題関心や分析枠組みの連続性を示しながらも、特にその理論をマイクロレベルの現実に突き合せていく中で、いくつかの新しい論点を導き出すにいたっている。そのひとつに、ハビトゥス (*habitus*) または身体化された性向 (*dispositions*) はどのようにして (再) 現働化¹する (*s'actualiser*) か、という問いの浮上がある。

P. ブルデューの場合、身体化された性向の体系としてのハビトゥスは、「持続的」にその行為の担い手 (*agent*) の実践を導く産出原理 (*modus operandi*) として位置づけられているので、基本的には、常に、またいたるところで作動しているものと了解される。ハビトゥスは、経験の累積の中で変化しつつも同一性を失わず、文脈ごとの現れ方の差異は、「置き換え=移調 (*transposition*)²」の可能性として問われるにとどまる。

これに対してライールは、過去の社会生活の中で身に着けた諸図式が必ずしも単一の体系を構成するとは限らず、「複数」の「習慣のレパートリー」として「ストック」され(う)るのだと考える。そして、その内部に異質な行動様式を保ち続けている「諸性向」は、現時点の行為の文脈との

¹ 現働化とは、過去のある時点で身体化した性向が現時点での活動文脈において再び表に現れてくることであるのだから、基本的にすべて「再現働化」である。したがって、「現働化」と「再現働化」を厳密に概念区分することに意味はない。本稿では、基本的には「現働化」と記し、一度潜在化したものが「再び」現れるというニュアンスの強い時には「再現働化」という言い方も用いる。

² 『実践感覚』においてブルデューは、「ハビトゥス」に次のような定義を与えている。「ハビトゥスとは、持続性をもち (*durables*)、置き換え可能な [=移調可能な] (*transposables*)、性向 (*dispositions*) のシステムであり、構造化する構造として、つまり実践と表象の産出・組織の原理として機能する、事前に傾向を与えられた (*prédisposée*) 構造化された構造である」(Bourdieu 1980=1988: 83, 訳文の一部を修正)。ここで「置き換え可能」とは、身体化された性向の体系が異なる文脈に引き移されても同一性を失うことなく、実践を産出することができることを指す。この *transposable* という言葉は、「移調」という音楽用語の比喩をとともなうものである。ひとつの曲は、編曲によって「調」を変えてもその同一性を失わない。ブルデューはそのような形で、ハビトゥスの可変的でありながら持続的な性格を表現していたのであった。

関係において、部分的または選択的に活性化する（s'activer）のだと主張する。では、個々の行為者が過去に身に着け、「待機状態」にある諸性向は、どのような機制のもとで現働化するのだろうか。

身体化された性向の現働化過程の記述において、ライールは「図式」の「転移（transfer）」に関する心理学的研究から多くの知見を借り受けている。転移とは、ある特定の文脈において学習したり、身体化したりした「行動・思考様式」や「能力」が、他の文脈においても発揮されることを言う。例えば、学校のある授業の場で学んだ知識や技術が、別の学習場面や教室外の社会生活の場面で活かされる時、「学習転移（learning transfer）」が生じたと言う。どのような条件の下で、またどのような機制にしたがって、転移（図式の現働化）は起こったり起こらなかったりするのかわかるのか。これが、心理学や教育学におけるひとつの研究課題となってきた。

ライールはこの枠組みを社会学的行為理論に引き移して、「行為＝性向＋文脈」という基礎図式を設定する。行為は、現時点における「文脈」上の諸条件と、これに応じて選択的に呼び起こされる「性向」の関数として、ある特定の形を取ると考えるのである。この時、「ストック」されている「複数の性向」の中からいずれの「レパートリー」が呼び起こされてくるのかを左右するのは、文脈の「種別（type）」の認識に関わる「実践的類推（analogie pratique）」である。「行為者が多少なりとも適切な形で行動することを可能にするような『能力（competence）』を動員することができるのは、現在の状況と、経験の縮図という形で身体化された過去の諸経験とのあいだの類似した部分」を「意図的、分析的ではなく、実践的かつ包括的に」（Lahire 1998=2013: 130）見いだすことができるからである。つまり、文脈は典型的に把握され、過去の経験の場面との種別的な類似——「似ている感じ」——を手がかりとして、その文脈にふさわしそうな「行為図式」や「行動の型」が呼び出されてくるとライールは考えるのである。

この認識枠組みを前提に置くとして、では、彼が言うところの「実践的類推」はどのように成り立つものなのだろうか。「実践的かつ包括的に」なされると言われる「文脈」の識別はどのような機制の下で成立しているのか。あえてこれを問うてみると、ライールの分析の中には十分に分節化されていない部分があることに気づく。そして、この未開拓の層を掘り下げていくと、ライールの提起した枠組みやこれを説明する際に用いる比喻——特に、「ストック」された「習慣のレパートリー」という表現——に付随するひとつの問題点が見えてくる。

ここで問われることになるのは、行為の「文脈」なるものがどのような要素連関によって構成され、それがいかなる働きかけによって行為者の「身体」に備わっている力を呼び起こしていくのかである。論点をやや先回りの示しておくとして、この点に関してライールがまだ主題化し切れていないように見えるのは、相互行為場面における他者の身体の現れと、身体的相互作用の過程である。相互作用論の視点に立てば、行為の文脈はあらかじめ自明のものとして成立しているのではなく、それ自体が相互作用を通じて指示され、実質化し、規定力を発揮するものである。そうであるならば、身体化された性向が呼び起こされる過程で、他者との相互作用、とりわけ身体次元での協働や共鳴の果たす役割が問われてよいのではないだろうか。

こうした問題設定は、ライール社会学の批判的検討にとどまらず、ブルデューらによって提示されたハビトゥス論の視点と、相互作用秩序の生成を記述するゴフマンらの視点を接続していくという、より大きな理論的課題の一端をなすものである³。ライールが述べるように、相互作用論の社会学は、「いまここ」のリアリティに視点を限定しようとするため、これに参入する諸個人がどのような履歴（過去の経験）をもって生きてきたのか、その結果として何を身に付けてきたのかを基本的に問わない傾向にある⁴。人々は、それぞれの場面で、状況の定義を参照し、相互の「まなざし」を取得しながら、「理解可能（accountable）」な現実を立ち上げようとする。各行為者は、それを成し遂げる術を知っており、そのような方法を使うことができるのであるが、そのことは、前提として不問にされるか、さもなければ、事実として事後的に発見されるべきものとして位置づけられる。しかし、人々がそのような「能力（competence）」や「傾向（tendency）」を備えているということは、必ずしも自明のことではないし、ライールに言わせれば、そのような「性向」がいかに過去の社会生活の中で獲得されてきたのかが問われなければならないのである⁵。

しかし、逆の視点に立てば、ブルデュー派のハビトゥスや実践の理論は、行為者の過去と現在をつなぎながら「多層的な構造的規定力」と「行為の産出」の関係を問う上では有力な分析ツールであるが、その行為や実践がいかに相互作用過程を組織していくのかを記述する上では、やや粗い枠組みを提供するにとどまっている。それぞれの行為の担い手が、過去の社会化の経験を通じて身体化してきたものは、現在の具体的な相互作用場面においてどのように発動し、また、その相互作用の秩序によってどのように活用されたり、制約されたりするのか。これを問うことが、通時態と共時態の接点に生じる社会的リアリティをとらえる作業になる。それは同時に、諸個人が個別の社会的場面において「何者でありうるか」を、分析的に記述するための視点を準備することにもなるだろう。

2. ハビトゥスの共同性と相互作用秩序

ハビトゥスが知覚や思考や行為の産出過程を方向づける基礎的な図式であるとするならば、一般的に、人々が同一または類似のハビトゥスを身体化している方が相互作用は円滑に行われ、スムーズな秩序形成がなされやすい、と考えることができる。ある場面を、人々が同じような「状況」として認知し、同じような「枠組み」にしたがって考え、類似の「図式」に則って行動する。この時、人々は言語的・反省的な調節を最小の範囲にとどめながら、相互の行為を通じて、理解可能な現実

³ 同様の課題を追求するものとしては、村井（2004, 2010, 2012 他）が挙げられる。

⁴ もちろん、行為者の過去の履歴、例えば「犯罪歴」のような負の意味をともなうものがスティグマ化している場面では、現時点での自己呈示の構成要素をなすものとして分析の対象になる。

⁵ ライールは、『能力としての愛と正義』（1990年）における L. ボルタンスキーが、行為者に「本性」としての「能力」を認めてしまったことを批判し、その「（歴史のおよび個人的な）社会的生成」を問わなければならないと論じている（Lahire 1998=2013: (22)）。

を容易に立ち上げることができるだろう。その意味でハビトゥスの共同性は、相互作用秩序を「下支え」する、身体化された土台である。その点は、ブルデューのテキストの中でも随所に確認されている。

生活条件の同一性は（少なくとも部分的に）類似した性向の体系を生み出す傾向にあるため、その結果として生じるハビトゥスの（相対的な）均質性（homogénéité）は、実践（pratiques）およびこれに規則性（régularité）と客観性（objectivité）を同時に与えるような成果（oeuvres）の客観的な調和の原理となる。その規則性と客観性は、実践の固有の「合理性」を規定し、それが自明または当然のものとして生きられるようにする。つまり、諸実践は、その実践の遂行の内に客観的に内包される行為および解釈図式の体系の実践的制御能力を備えた行為の担い手たちにとっては、またそのような行為の担い手たちにとってのみ、直接的に理解可能で予見可能なものとして生きられるようになるのである。（Bourdieu 2000:264）

いかにもブルデューらしい、循環的な規定関係を一挙に言い尽くそうとする文章であるが、私たちの文脈に引きつけてみれば、次のようないくつかの命題に分けて整理することができる。

- 生活条件が同一であれば人々のあいだに類似した性向の体系（ハビトゥス）が生まれる。
- ハビトゥスは、意識的・言語的な制御（象徴的制御）を行わなくても、実践的制御の水準で行為や解釈の図式として作動するものであり、したがって、均質なハビトゥスを身に着けた人々にとっては、そこから生まれる諸実践は「自明」で「当然」のものとして経験され、直接的に理解可能で予見可能なものとなっている。
- したがって、共有されたハビトゥスの均質性は、諸実践の調和をもたらす原理となる。それは、生活世界の「自明性」と「自然」な相互作用秩序形成の基盤である。

しかし、こうした論述は逆に、異質な生活世界で育ち上がってきた人々が会おう場面で、どのようにして秩序ある相互作用が可能になるのか、また、人々がその場（文脈）の要求にしたがって「ふるまい方」を変えていくような現実を、ハビトゥス論や性向論の視点からどのようにとらえることができるのか、という問いを惹起することになる。

この時、ライールが提示した「複数的性向」のモデルは、ブルデューの「一貫性をもって持続するハビトゥス」のモデルに比べてみると、異質な要素の関わりあう場面での相互作用をとらえる力を確かに高めているように見える。例えば、学校教育を經由して異なる階級的世界に参入していった個人——「階級の裏切者」——は、新しい世界での対人関係場面と出自の生活世界での対人関係場面で異なる「ふるまい」（例えば、言葉遣い）を使い分けることができる（または、使い分けてしまう）。こうした事実を「性向」と「文脈」との相互規定関係の中で記述する上では、ライールの視点の方が効力を発揮する。

だが、私たちはここで冒頭の問いに立ち戻ることになる。このような対人関係場面、相互作用場面において、行為者の身に備わった性向の現働化は、いったいどのようにしてなされているのだら

うか。上に見たようなブルデューの視点を踏まえて見れば、さまざまに異なる社会化の環境を経由してきた人々、したがってまた多少なりとも異質な（しばしば複数の）文化を身に着けた人々が出会う場面で、各行為者が多少なりとも協調的に性向を現働化させることができなければ、行為相互の接続はぎくしゃくとしたものになり、円滑な秩序形成が難しくなると考えられる。そして実際に、そのようなミクロレベルでの異文化摩擦とでも言うべき事態はいたるところに生じているはずである。しかしそれでも多くの場面で、人々は複数の「レパートリー」の中からそれなりに適切な部分を選び起こし、同調的に相互作用秩序を立ち上げることができているように思われる。

おそらく、文脈にふさわしい性向の活性化は、認知的な水準で「状況の定義」が与えられれば自動的になされるというものではない。それと同時に、あるいはそれ以上に、「性向体系」の「シフト」は、その場面に現れた他者との直接的な関係の中で、より身体的な次元での出来事として生じているのではないだろうか。ここに、以下の論述を導く仮説的視点を置くことにしよう。

3. コード・スイッチングとコード・ミキシング

相互作用場面、特に身体と身体の相互干渉が生じる際に、私たちが身に着けている「感覚や思考や行為の図式」はどのようにして呼び起こされていくのか。ひとまずはこれを、言語的相互作用（発話・対話）について考えていく。

はじめに、ライールが『複数の人間』の中で取り上げている、多言語使用者についての社会言語学的な研究の成果を手がかりとしてみよう。それは、多文化的文脈で生活をしている人々が、さまざまな実践の文脈で、それぞれが身に着けた（複数の）言葉をどのように使い分け、言語から言語へと移行し、あるいはまたそれらを混在させているのかに関わるものである。

例えば、スペイン語を母語としながら、英語でのやり取りが通常化しているようなビジネスの世界に関わっている人々は、会話の中で母語から英語に、英語から母語に切り替えたり、両者を混在させたりすることがある。この時、ひとつの文（または発話単位）から別の文（発話単位）へと移行する際に言語コードが切り替わることを「コード・スイッチング」、ひとつの文（発話単位）の中に複数の言語コードを混在させることを「コード・ミキシング」と言う。彼らは、その場での話題が堅苦しいものになったり、相互の関係が冷たいものになったりすると、母語から英語に切り替えることがある（Lahire *op.cit.*: 122）。

あるいは、高い学歴をもたず、日常的には「学校的に正しい文法」にしたがって話をしていない人でも、フォーマルな会話場面（例えばインタビュー場面）では、文法的におかしい表現はまったく使われないのであるが、話題が日常生活に関わること（例えば、日々の料理の仕方）に及ぶと、とたんに「間違っただ」言葉づかい（例えば I don't measure nothing のような二重否定）が浮上してくることがある（*ibid.*: 122-123）。

こうした事例において、コードの選択的な浮上（現働化）を左右しているのは、確かに「文脈」の種別である。それが打ち解けた会話の場面なのか、堅苦しい議論の場なのか。公的な聞き取りの

場面なのか、日常的な事柄に関する気軽なやりとりなのか。それに応じて、身体化されたレパトリーの中から、どのような図式が呼び起こされてくるのが変わってくる。しかし、行為の文脈や状況の定義に関する「認知」だけで、コードの切り替えや混在が生じているわけではない。

ここで参照されてよいと思われるのは、方言と標準語（東京言葉）の使い分けに関わるいくつかの経験である。

以前、筆者のゼミに山形出身の男子学生（M）がいた。Mは、大学（在東京）での友達づきあい、教員との会話の中では、ほとんど「なまり」を感じさせない、その意味で「きれいな標準語」の使い手であり、たまに友人たちから（からかい半分で）「山形弁でしゃべってみろよ」と言われても、「いやあ、できないよ、ムリムリ」という感じで退けていた。ところがある日、ちょうどゼミのメンバーが集まってそんな話をしているところに、彼の携帯に電話がかかってきた。実家のお母さんからである。Mの言葉は、電話に出るなり「ああ、おがさん」と、思い切り「山形弁」にスイッチしていた。その瞬時の「切り替わり」がおかしくて、みんなでどっと笑ってしまった（失礼!）ことを覚えている。

この時、彼の中から「山形弁」を呼び起こしたものが何であったのか。それは、もちろん、電話の向こうの相手が「山形の母」であるという認知である。しかし、それは同時に、「山形弁」で彼に話しかける、その母親の身体（声）の現れではなかっただろうか。それは確かに「（認知された）文脈への適応」ではあるのだが、それ以上に「身体的呼応」あるいは「共鳴」と呼ぶのがふさわしいような出来事ではなかったかと思われるのである。

では、この二つの次元（文脈認知と身体的共鳴）にずれが生じた場合にはどうなるのだろうか。ここで思い起こされるのは、あるテレビ番組内の企画の場面である。マシュー南（タレントの藤井隆）がMCをつとめる「Matthew's Best Hit TV」という番組が放映されていた。その中で、地方出身の芸能人をゲストに呼び、地元の家族や友人に番組内で電話をかけてもらうというゲームのコーナーがあった⁶。そのゲームでは、ゲストの芸能人は「方言を使ってはいけない」「会話を標準語で通す」ことを求められている。もちろん、電話の向こうの相手は、それぞれの「方言」で語りかけてくる。すると、ほとんどすべてのゲストが「標準語」で通すことができず、いけないとわかっていながら相手の言葉に引きずられ、その声に呼応してイントネーションが変わり、語尾が変化し、語彙が呼びこまれてくる（意図せざるコード・ミキシングの発生）。その悪戦苦闘の場面が「笑い」を誘う、という仕掛けであった。

この場面では、発話者（ゲストの芸能人）は、「方言を使ってはいけない」という「ゲーム」の場であるという「認識」をもってのぞんでいる。しかし、そのような意識の力では、自分が身体化している言語コードの入れ替わりをコントロールすることができない。「標準語」と「方言」の使い分けには、当事者（個人）の意識的制御（象徴的制御）よりもむしろ、身体的相互作用にもとづく「共鳴」の力に委ねられている領域があることが分かる。

⁶ 2001年から2006年まで。テレビ朝日系列。このコーナー「なまり亭」は2005年に放映された。

「標準語」を話す。「方言」を話す。それはどちらも、身体化された言語的行為図式の現働化である。多くの場合に、それらが場面によってきれいに使い分けられているということは、言語図式が選択的な現働化を可能にするような複数の「習慣のレパートリー」として準備された状態にあることを示している。この時、どこで、どのような言葉を選択するのかは、ある程度まで意識的な制御にしたがっている（文脈の認識にもとづく、意志的な選択）。しかし、上にあげたような事例は、「意識」がその「選択的現働化」を完全にコントロールすることはできないことを示している。どれだけ「標準語」で話そうとしても、目の前に現れる他者が「方言」で語りかける時には、その影響力を逃れて、自律的な発話の主体（発話様式を選択主体）にはなりきれない。とすれば、発話行為を身体化された図式の文脈に応じた現働化として見る際に、これを相互身体的な活動としてもまた位置づけてみなければならないだろう。ライールが言う「実践的で包括的」な類推は、そのひとつの位相において、身体相互の呼応プロセスに埋め込まれた形で進んでいくように見えるのである。

ここから導き出されるのは、次のようなごく単純な枠組みである。すなわち、身体化された性向（ここでは、言語の運用コード）の現働化過程（実践的類推過程）に、二つの位相での文脈識別が関わっているということ。そのひとつは、言語的（概念的）な文脈認知のプロセス。もうひとつは、身体的相互性作用における「共鳴⁷」のプロセスである。

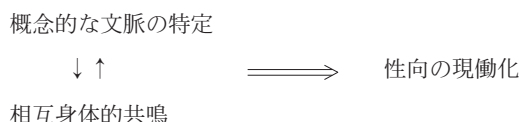


図1：性向の現働化に関わる文脈の「実践的類推」

この時、「概念的な文脈の特定」と「身体的共鳴」のいずれが先行的または基底的であるのかを、個別の文脈から離れて論じることに意味はない。それは、状況ごとに経験的に確認されるべき事実である。基本的な図式としては、二水準（二要素）の相互規定的な関係の中で「文脈」が構成され、これに応じた「性向」の活性化がなされていくのだと見ることができる。その上で、ライールがまだ詳述していない領域として私たちが考察を進めるべきは、「相互身体的共鳴」による「性向」の呼び起こしプロセスにある。引き続き「発話」行為を例にとりて、この点についての検討を継続しよう。

4. 「なぞり」としての発話

上述の目的のために、発話または発話という営みを、概念的に有意義な記号情報の伝送という視

⁷ 本稿では相互同調的な関係にのみ触れているが、相互反発的、敵対的な共鳴もまたありうる。

点から離れて（少なくともそれに限定されず）、相互身体的な呼応関係の内に位置づけてみることに有益であろう。そのために、「発語」行為が他者の言葉の反復による応答という形で現れる場面に着目してみることにしよう。

以前に筆者が街中で「拾い集めた」会話のひとつに、「なんだよ返し」と呼ぶことができる場面がある。それは、二人の中学生と思しき男子の次のようなやり取りである。

- A なんだよ
B え、なんだよ
A なんだよ
B なんだよってなんだよ
A だからなんなんだよ
B だからなんなんだよってなんなんだよ
A なんでもねえよ
B なんでもねえのかよ
A なんでもねえよ
B だからそれなんなんだよ

「意味」があるのかないのか分からないこの相互作用場面で、彼らはいったい何を成し遂げようとしているのだろうか。おそらくここでは、相手からの（きわめて漠然とした）「呼びかけ」にとりあえず「応える」こと、互いに「応え続ける」ことだけが求められている。発語は応答によって着地点を見いだす（岡田2012, 2013）。誰かが応えてくれることによってはじめて、発せられた言葉は「呼びかけ」の態をなす。その応答は、多くの文脈では、「語られた意味内容」に対する「有効な返答（有意味な情報の提示）」として差し出される。しかし、少なからぬ場面では、「何が（いかなる内容が）語られた（送り返された）のか」よりも、「とりあえず反応があった」ことが大事なものになっている。

しばしば人々は、この「呼びかけと応答」の成立だけを確認するかのような、（メッセージ内容の水準では）「無意味」なやり取りをくり返す。そのためのひとつの技法が、おうむ返しに相手の言葉を反復することである。例えば、「やば！」には「やばっ！」を、「かわいい！」には「かわいいね！」を返す。これが、「関係」の成立をうながす基本技法になる。上の「なんだよ返し」は、その、少し洗練された（笑）一技法である。

では、「なんだよ」に「なんだよ」を返し続けることで、いったい何が達成されているのか。ひとつの獲得物（達成される状態）は、「ノリ」の共有である。この場合のノリとは、文字どおりの意味で発語のリズムを共同化していくということであり、同時にある種の「スタイル」、漠然としてはいるがこの世界に対する「身構え」のようなものを、相互的に調節しながら重ね合わせていくということでもある。

「やっべえ！」という声を発した人に、「うぁ、まじやべえ」と返すことと、「はい、大変な問題状況だと思います」と応えることとは、メッセージ内容において「類似」のことを語っているが、二者の関係形成という点ではまったく異なるふるまいをしていることになる。前者においては、「ノリ」の共有がなされているが、後者においては「意味の確認」しかなされていない。言い換えれば、前者は「やっべえ！」という声に身体的な共鳴を示しているが、後者は、「認識上の追認」しか示していないのである。

こうした、ノリの共有にもとづく反復的応答の中に典型的に現れてくる「発話」の様式は、他者の身体的反応の同調的な取り込みとして生まれているように思われる。重要なことは、他者の身体が目の前の事態にどのような構えを取ろうとしているのかを、発話を通じて確認し、その身構えを自分自身の身体に引き移して反復する（共振する）ところにある。そして、相互的な発話（対話や会話）の場面では、充実した意味をもつメッセージの交換がなされている場合でも、ある位相においてこの種の「ノリの共有」や「共振」が生じているのが通常である。真面目な研究報告がなされている時、聞き手は、そこで語られている「内容」を理解し、適切で「意味のある」知的応答を返そうとしているのであろうが、その前提において、その人の発話を「真面目な」ものとして受け止めるような身構えの共有が図られているはずである。故意に相手の態度を茶化したり、はぐらかしたり、その場の雰囲気——「空気」——に抵抗したりするのでない限り、「発話のモード」の共同化が（時に自明なものとして）達成されている。「なんだよ返し」は、（有意味なメッセージの交換という次元が脱落し）この意味での「モードの共有化」だけが純化された形で遂行され、確認された場面である。

このような場面、あるいはこのような位相における、発話行為の同調的反復の様式を「なぞり」と呼ぶことにする。発話内容に対する概念的応答とは別の次元で、私たちは他者の発話の「モード」を「なぞる」ところからコミュニケーション過程に参入していく。

「なぞり」とは、発話のモードにおける同調性の獲得過程である。この場合の「同調」は、発話内容に対する同意や承認とはまったく別の現実を指す。口から泡を飛ばして自分の論を主張し相手の立場を批判している「二人の学者」は、学問的立場において根底から相容れないものであったとしても、その議論の「モード」において完全に同調的である。二人はそれぞれに相手の考えていることがまったく分からない、間違っていると主張しているかもしれないが、この水準において相手のふるまいを「なぞりあって」いる。

私たちの発話行為は、基底的なレベルにおいて他者の発話の「なぞり」として生起する。もちろん、こうした「なぞり」のコミュニケーションの成立過程にも、多くの場合には「文脈認識」が関わっていることだろう（例えば、「ここは学会での討論の場面である」という認識）。しかし、時には、その認識の形成に先立って、あるいはその形成を下支えするプロセスとして、しばしば身体相互の呼応関係を見いだすことができる。逆に、身体的な共鳴が先に生じ、これにもとづいて文脈が指し示されていく場面もあるだろう（相手の熱い語りを引き込まれて、いつの間にか「真剣な議論の場」になっている、というような場合）。

こうした「なぞりあい」の成立は、多くの場合、互いに自律的な行為主体によって意図的に引き起こされているというよりも、他者の身体がある様式性をもって現れ、自己の身体が「おのずから」そのモードに呼び込まれていくという形で生じているように思われる。現象学的な視点から「コミュニケーションの原初的な形」を探求している鯨岡峻は、「私」の生きている世界に「他者の身体は豊かな表情をもって立ち現れ、その力動感や相貌性はそこに現出する私の身体にある種の感応を呼び起こし」（鯨岡1997：82）ているのだと論じる。そして、ある身体がある表情をおのずからまとうという面を「表出・志向性」、それが他者の身体を巻き込み感応させる面を「誘引性」と呼ぶ。この二面は、相手となる他者の側から見ればそれぞれ「感応性」と「応答性」に対応する。そして、この「表出」と「誘引」、「感応」と「応答」からなる身体的相互作用の基底には「身体の開在性」すなわち「いつもすでに相手の表出や志向を受け止められるように、相手に向けておのれの身体を開いているという状態」（同上：85）があると言う。「たとえば、男が大きく両手を挙げ、そこに駆け寄った恋人が体を投げ出すようにその相手の胸に飛び込む」ような場面。こうした一連の動きは、「互いの身体の表出・志向性が他者身体を巻き込み、それが交叉するところ」（同上：85）に成立している。ここで重要なことは、「私の身体」は常に、またすでに他者の身体に開かれたものとしてあり、ある種の相貌性・表情をもって現れる他者の身体に「巻き込まれる」という形でそれに応答していくのだという点にある。この次元において、自己の受動性と能動性は表裏一体のものとしてある。上に見たような「なぞりあい」のコミュニケーション、他者の発話モードの引き移しによる同調性の獲得過程もまた、鯨岡が言うような、互いの「巻き込まれ」によって生じていると見ることができる⁸。

この身体的共鳴の次元をさらに可視化するために、次に、子どもが言葉を発する力を獲得していく段階に目を向けてみよう。

5. 言語獲得過程の相互身体性

人がどのようにして「発話能力」を獲得していくのかについては、発達心理学や行動科学の領域において多くの知見が蓄積されている。その中で、分節化された音声記号の理解と使用に先立って、他者が発する「音」の「音楽的反復」を通じて子どもが「言葉」を獲得していくのだという指摘がなされている。

正高信男は、『0歳児がことばを獲得するとき』において、「0歳児」は「クーイング」と呼ばれる音声（「アー」とか「クー」と響く柔らかな声）を発する段階から、すでに他者（例えば母親）の反応に答えようとしているが、この段階での子どもの発声に対して他者（母親）が「おうむがえ

⁸ こうした「巻き込まれ」の過程を「社会的アフォーダンス」という言葉で言い換えることもできる。大きく両手を挙げた男の身体は、その胸に飛び込むという行為をアフォードする。ある表情をもって現れる他者の身体は、「私」があるモードをもってそれに呼応する可能性をそこに開いているのである。

し」的に返事を返し続けることが、子どもの「声の質を変える」ための条件になると論じている。例えば、子どもが「アック」、「オウイ」と響く声を発すれば、「母親」も「アック」、「オウイ」と応える。その反復が子どもに、「自分の発した音」と「同じ音」を「母親」が返している（これは「おうむがえしなのだ」という認知を生み、発せられた音の質に対する注意をうながすのである。そして、その模倣的応答の反復の中で、今度は自分が相手の発する音を「真似る」ようになる。このようにして、「おうむがえし」の継続が、社会的な行為としての発話の能力へとつながっていく（正高 1993）。

正高はさらに『子どもはことばをからだで覚える』で、「生を授かったばかりの段階」の「赤ちゃん」にとって、「周囲から入力される情報」は「メロディーとしてやってくる」（正高 2001：1）と論じている。（「あ・い・う・え・お…」のような）言語的音節を聞き分けることができない段階でも、子どもは耳に届く音の流れの中に「めりはり」を聞き取り、これを音の「かたまり」に分けて受け止めること（聴覚次元での「ゲシュタルト化」）ができる。この時点で、連続的に届けられるさまざまな音の中から、「協和音」を聞き分け、これを選好的に聞き取っていこうとする傾向が備わっているのだという。この基礎的能力をもとに、与えられている音の流れ（メロディー）の中から「音のまとまり」「単語のまとまり」を切り出していく力が培われていく。だからこそ、この乳児期において、言葉が音楽として、つまり「歌」としてもたらされることが重要なのである。

そして、この「聞き分ける」という力の発達は、言葉を発する力の成長と連動する。音楽的な分節性の識別は、同時に音を区切って声を発するという行動、「かたまり」と「かたまり」の分節構造をもった発話行動へとつながる。子どもは生後6週間から8週間ほどで「クーイング」と呼ばれる発声を始めるのであるが、生後6か月から8か月の頃になると、これが「喃語」と呼ばれる「前言語的音声」の段階へと移行する。「喃語」は、その中に「複数の音節」を含んでいること、また各音節が「子音プラス母音」の構造をもっている点で「クーイング」と区別される（同上：65－66）。つまり、まだ明確な意味を伝え得るような「単語」の態をなしていないとしても、その音声的分節化のレベルにおいて「言語」の水準に一步近づいているのである。

重ねて興味深いことは、こうした「言葉を聞き分け、発する」力の獲得は、口腔を使った「音声」の発出という機能に限定されて生じるのではなく、体全体の多層的な連動の中で生じていくという点にある。例えば、子どもが音節的な構造をもった「声」を発するにいたる過程では、「笑い声」（「ははは…」というような）をあげることが重要な意味をもっているのだが、この「笑う」という行動は、顔や口だけでなされているわけではなく、一緒に足をゆすり、手を激しく動かすということが起こる。この時、子どもにとって「声」を発することと「手」や「足」を動かすことは、ひとつながりの行動であって、こうした全身の運動を通じて子どもは「音声言語の産出に不可欠な」「リズムをきざむ」技術を獲得していく（同上：79）。

人と人の関係の原型を「うたう」こと、すなわち、「呼吸」を合わせること、「息」や「気」のレベルでの同調性に求めるやまだようこもまた、子どもの言葉の獲得過程における、身体的な共鳴

の重要性を指摘している。

乳児の声や動きに合わせて母性的な社会行動がひきおこされ、それは乳児の同調性をさらに高め、その子どもの動きに大人も調子を合わせ、二人は一体となってもに快いリズムカルな流れにのる。このように共同でなされる共鳴的な「うたう」行動こそ、言語的コミュニケーションの原点であろう。(やまだ 2010 : 285)

例えば、親が子どもに「いい子、いい子ねえ～」と語りかける時、その言葉は文字通り「うた」と呼ぶべきリズムやイントネーションをともなっている。その「うた」を介して、親と子のあいだには「共鳴しながら合唱したり輪唱したりするような心地よいリズム」が流れ、「ともに『うたう』共通世界」ができる。やまだは、このような「共鳴的な響き合い」を「うたう」関係と名づけ、そこに「コミュニケーションの原点」を見いだしている。

そして、コミュニケーションを支えるこうした間身体的な共鳴は、子どもだけでなく、成長後の対人的関係の中にも見いだすことができる。「大人の会話」を分析してみると、「聞き手と話し手はダンスのような同調的でリズムカルな動きをしている。たとえば聞き手は、話の内容には関係なく、音節が変わるたびにそれに応じて、身体の動きを止めたり、体重を交互の足に移したり、手足を動かしたりする」(同上:282)。こうした身体的同調の形成を、やまだは「惹きこみ (entrainment)」と呼ぶ。

人間のコミュニケーションには、身体から発せられる声や身体の動きなどのリズムが大きな役割を果たしているが、惹きこみとは、会話をかわしているとき、話し手と聞き手がお互いに相手の身体の動きやことばに惹きこまれて無意識のうちに同調的でリズムカルな動きをしていることをいう。(同上 : 302)

この言葉を借りるならば、先に見た「なんだよ返し」の場面とは、相互的な「惹きこみあい」が、同型の語のリズムカルな反復によって確認された場面であると言えるだろう。

発話に関わる「感覚-運動図式」の形成についてのこうした研究から、ひとまず私たちが引き出すことのできる知見。それは、言葉を発するという行為を支える身体的能力の形成が、他の発話者(例えば、母親)の出現と働きかけ、そしてこの他者との模倣的で反復的な相互作用(例えば、おうむがえし)に負っているということであり、その相互作用は、音声の音楽的な分節性と、それに応える身体レベルでの応答に特徴づけられるということである。概念的な意味の理解よりも前に、他者の発する音を(そのリズムを)身体的に反復すること、言い換えれば「なぞる」ことが、「発話の身体図式」の獲得プロセスなのである。

そして、この「なぞり」の経験の反復は、言語に媒介された明確な状況認識がなくても、例えば「ここは声をあげて笑ってよい場面」、「おとなしく黙っていることが望まれる場面」というような

識別を「実践的」に可能にするように思われる。周囲の大人（例えば母親）が、子どもの発声を模倣的に反復しながら、ある語りかけのモードをもって（例えば、にこやかに）子どもに言葉を返していく。その大人の発語のモードに全身で共鳴しながら（例えば、体をふるわせて笑い声をあげながら）さらに子どもは応答することができる。ここにひとつの「ノリ」の共有が生まれ、ある種の感覚的な快をとめないながらお互いの発話を増幅させていく。つまり、そのような応答返すことが「適切な」ものとして受け入れられていく文脈が形成され、それとともに「笑い声をあげる」という身体図式が獲得されていくのである。文脈に関する実践的な識別の感覚と発話の力が同時に身体化されていく過程をここに見ることができる。

6. 「転移論」から「文脈横断論」へ

このように、言語的身体図式が「なぞり」の反復によって獲得されるのだとすれば、それは同調可能なものとして現れる他者の身体の介在を前提にしていることになる。そしてこれは、幼児期だけの現実ではなく、その後の言語的能力の獲得過程についても、継続的に妥当する。例えば、学校で外国語を覚えた人間が文法的知識や単語量だけを増やしても一向にしゃべれるようにならないのに対して、ある言語圏で生活していた人は、文法的知識などなくても平気でしゃべることができる。それは、複雑な文法をとまなう発話の能力もまた、他者の身体との共鳴関係の中で取得されるものだからである。

そして、この「他者の身体の介在」という条件は、言葉の獲得（身体化）の過程だけでなく、その能力の再現働化の過程にも強く関わっている。

ある一時期に異なる言語圏で生活し、その時にはそれなりに「しゃべれていた」はずの言葉も、その土地を離れ、言葉を使う場面から遠ざかると、話そうとしても容易に話すことができない。しかし、その言語圏に戻ってしばらく人と接していると、どうやってしゃべっていいのかわかす「思い出す」ようになる。潜在化していた「言語的身体図式」が再活性化されてくるのである。この時、やはり、その言葉で「私」に話しかけてくる他者の存在は大きな役割を果たす。単純にその地域に足を踏み入れ、例えばここは「フランス（語圏）だ」と認識するだけでは、フランス語を「しゃべる力」は戻ってこないが、フランス語での実際の対話をくり返していくと、いつの間にか元の程度には話せるようになっていく。

この認識を、次のように一般化してみよう。すでに身体化している（けれども、一定期間待機状態にあった）性向や図式を、「私」がある文脈で現働化できるかどうかは、その発話する身体を同調的に呼び起こしてくれる他者（の身体）が介在するかどうかにかかっている。つまり、再現働化のプロセスにおいても、「私」は他者の身体を「なぞる」ことによって発話の主体となるのである。

したがって、身体化された性向の中の少なくともある部分については、他者の媒介と無関係に「出し入れ」の効くものではなく、相互身体的または関係依存的にのみ再現働化しうるのだとすることができる。この時、その性向体系（図式）は、ある形を取って実体的にストックされていると

言うより、継続的または断続的な相互作用の中での、持続的形成過程の中にあると言う方がより適切であるかもしれない。

この二つの「言い方」の差異は微妙なものである。しかし、そこにある落差を簡単に無視してしまってもよいと思われない。この点をより鮮明にするために、心理学の領域における「学習転移」と「文脈横断的学習」の研究を参照し、特に前者から後者への力点の移動を確認してみることにしよう。

「学習転移」とは、「過去の問題解決の経験（ベース）を新しい問題の解決（ターゲット）のために使用すること」（香川 2008：464）を言う。心理学における伝統的な「学習」の理論は、「特定の時空間を超えた普遍的な転移メカニズム」を仮定し、社会文化的変数を統制・排除した実験的手法によって、「転移」の条件に関する経験的知見を集積させてきた⁹。しかし、社会文化的文脈性を重視する近年の人間科学は、このような「自然科学的」手法の限界を指摘し、学習と転移のプロセスを、具体的な「状況」に根ざした「活動」としてとらえ返そうとしている。「活動理論」あるいは「状況論」と呼ばれるこれらのアプローチは、「学習」を、外在的に準備された知識を個人が「内化（内面化）」し持ち運び可能（ポータブル）な道具として使用できるようになる過程と見なすのではなく、特定の具体的な状況での共同的活動への参加の連続的過程と考える。J. レイヴとE. ウェンガーの言葉を借りれば、「この観点では、学ぶこと、考えること、さらに知ることが、社会的且つ文化的に構造化された世界の中の、世界と共にある、また世界から湧き起こってくる、活動に従事する人びとの関係」（Lave & Wenger 1991=1993：26）だとされるのである。したがってまた、「転移」という言葉でとらえられていた事態も、「個人」が携えている「ポータブルな知識」の「転用」としてとらえられるのではなく、領域を超えて、個人が新たな活動の場面に参入し、そこで新たな協働的活動を構成していくプロセスとして把握されることになる。それは「様々な道具や人々との関係性のレベルないし集合レベル」でとらえられるべき出来事であり、「転移」の可能性は、個人の能力の問題であるというよりも、異なる文脈の中で行動が再編されていく過程に個人がどのように参加し続けるかという観点から考察されなければならない。こうした展開を踏まえ、香川（2008）は、この新たな視点を「文脈横断論¹⁰」と呼んでいる（香川、前出：464）。

この意味での「文脈横断」とは、人との関係だけでなく、人工物や制度や技術などをふくむ「全体的な協働的關係」の「再編」の過程であり（上野 2001→香川 2008：476）、過去の経験において身についた「知識」や「やり方」の再現働化は、現在時点の文脈における「相互行為の中で展開する」ものと見なされる。「学習転移」は、他者たちとの協働的活動の中で、その文脈に応じて様相

⁹ レイヴはこの点を批判し、認知や学習の活動を「実社会」の中の具体的な文脈において研究することを提唱し、C. ギャーツの言葉を借りてこれを「アウトドア・サイコロジー」と呼んだ。「実社会においてどのような活動が実際に行われているか、すなわち実践については、最近になって理論づけがなされるようになってきたが、それは、これまで実験室や学校のなかから閉所恐怖症気味に認知を考えていた理論的立場を脱却する手がかりとなるだろう」（Lave 1988=1995：1）。

を変えながら達成されていく。したがって、「文脈横断的学習」は「実践共同体¹¹」(Lave & Wenger, *op.cit.*) への、個々人の「参加の軌道」に即して理解されなければならない。

ここに示されている、「転移論」から「文脈横断論」への移行は、認識の「転換」と言えるほど断絶的なものではない。しかし、「能力」のとらえ方に関して確認しておくべきひとつの力点の移動がある。「転移論」は、能力を「ポータブル」なものとしてとらえている。すなわち、過去のあつた文脈の中で個人が能力を身に着け、これを別の場面に持ち運んで「転用する」ことができるかどうか問われているのである。これに対して、「文脈横断論」では、「能力」そのものの「文脈依存性」あるいは「関係の性格」がより強調されている。人は「能力」を所有し、持ち運ぶのではなく、「能力」の持続的または断続的な形成を可能にする活動場面を横断しながら、常にそれを再編し続けるのだと見なされる。

言うまでもなく、ライールの「ストックされた習慣のレパートリー」としての「性向システム」という比喻は「転移論」に対してより親和的である。そうだとすれば、心理学における「文脈横断論」への移行は、そうした物の見方の適切性に関して、少なくともひとつの問い直しのきっかけを与えるだろう。裏の倉庫にストックされている商品を交互に店舗に並べて見せるような形で、私たちは「性向」の出し入れを行っているのだろうか。そのような比喻を用いることで、抜け落ちてしまうニュアンスは一体何か。おそらくそれが、問われるべきことのひとつとしてある。

7. 能力の身体化と相互身体性

ともあれ、活動理論はますます、「私」には何かができるということを一個人の内に閉じた事実と見なすのではなく、他者との協働関係の中で獲得され、かつ発揮される事態としてとらえ返す方向に進みつつある。その視点に立てば、「身体化された性向の現働化」も、個々人の行為者の内に実体的にストックされたシステムが外部からの情報によって呼び出されて稼働していくプロセスとしてではなく、協働的活動に参加する人々のふるまいが、個別主体のもつ潜在的な力を呼び起こしつつ、相互作用の中で達成していく事態として把握されねばならない。

これはおそらく、L. S. ヴィゴツキーが「発達の最近接領域」(Выготский 1935=2003) という

¹⁰ 「文脈横断論」は他方で、「状況論」、すなわち学習は個別の状況に埋め込まれた形で起こるという議論が、転移の可能性を否定してしまう(またはそのように理解されてしまう)ことを回避し、文脈の境界を越えながら、諸個人が持続的に学習していく可能性をとらえようとするものでもある(香川 2011 参照)。実際レイヴは、認知と学習の文脈依存性を強調するあまり、「転移という概念が深刻な誤りだ」(Lave 1998=1995:59)とまで述べている。確かに、文脈や関係とは独立に「普遍的な能力」が形成されると考えることはできないのだが、それが文脈の境界を超えて発揮される可能性を否定してしまうこともまた、行き過ぎた主張になるように思われる。

¹¹ ここでの「共同体」は、制度化されて安定的に組織化された社会的集合体ではなく、人々のさまざまな実践が相互的に組織化される社会的場面(文脈)を指している(茂呂他(編) 2012: 34参照)。

概念を提起した時点で、そこに内在していた視点である¹²。この概念の理解をめぐってはいくつかの解釈が示されている¹³が、いずれにしてもそれは、学習という出来事が協働的な文脈の中に生じることを前提にして、個人が何事かを「できる／できない」という事実が、その関係性に応じて「差分」をはらみうるということを示している。例えば、「子どもは大人など自分よりも当該課題に対してすぐれている他者と共同することによって現在の自分の発達水準では達成できないこと」を、「共同で達成する状態」(石黒 2004:6)になる。つまり、自分一人のできることと他者による支援的な関与があればできることの間には「差異」があり、このギャップこそ、教育的相互作用(教授と学習)を有効にする領域(発達の最近接領域)である。学習者の視点から見れば、他者とともに特定の活動に参加することが、一人では「できなかった」ことを、やがて自分で「できる」ことに変えていく。だからこそ、スポーツのトレーニングを(たとえその種目が個人競技であっても)集団で行うことに効果がある。レイヴらが「正統的周辺参加」(Lave & Wenger, *op.cit.*)と呼んだ徒弟的な修行の場では、継続的に「古参」の人々と共に仕事をするのが「新参者」を一人前の職人に育てていく。

こうした支援と学習の過程は、少なくともその一面において、他者の身体的模倣、自他の身体相互の連動に支えられている。新米の職人見習いは、文字通り、古参の職人の体の使い方を「なぞる」ことによってその仕事を身に着けていく。新人のスポーツ選手は、ベテラン選手と同じチームで、連動的にプレーする中でスキルを高めていく。それぞれの個人が、ある何事かを「できる」ということは、こうした相互身体的基盤の上に成り立っているのである。

諸個人の身体の側に蓄えられた、何事かを「する」ために呼び起こすことのできる「図式」や「性向」の体系。その獲得過程(学習)には他者との協働が不可欠なものとしてあることを、活動理論は示唆している。身体化された性向の現働化には、こうした協働的学習が断続的に、つまり一定の時間的隔たりをはさみながら継続される事態としてとらえられる一面があるだろう。

ただし、個々人が身体化した図式や性向が、その個人に働きかける他者の身体に強く依存して現

¹² L. ホルツマンは、ヴィゴツキーの「活動」概念をマルクスの発想に引き戻し、「本質的に社会的で、協働的で、相互反映的で、再構築的」(Holzman 2009=2014:22)なものとして位置づけている。彼はヴィゴツキーの仕事「成ることの理論 (theory of becoming)」と呼ぶ。「発達概念の構想に関するかぎり、それは全体における質的転換に関わっていた。それは存在の状態というよりも生成に関わるものであった」(ibid.: 25)。

¹³ レイヴとウェンガーによれば、「発達の最近接領域」の概念について3つの異なる解釈の流れがある。第一のそれは「学習者が単独で取り組むときに示す問題解決能力と、より経験を積んだ人に助けられたり、彼らと共同で取り組むときに示す問題解決能力の距離」と見るもの。第二は、「教授によってアクセス可能になる」ような「社会歴的文脈によってもたらされる文化的知識」と、「個々人の日常的経験との間の距離」と見なすもの。そして第三が、「個々人の日常的活動」と「集合主義的」あるいは「社会レベル」の活動との距離と見るものである(Lave & Wenger 1991=1993:23-24)。この第三の流れに位置づけられるY. エングストロームは、「個人の現在の日常的行為と、社会的活動の歴史的に新しい形態」とのあいだの「距離」として、この概念を再定式化している(Engeström 1987=1999: 211)。

れてくるのか、それとも、特定の文脈認識があれば比較的自立的な形で現働化されるのかについても、個別の状況を離れて一般化された見方を進めてしまうことはできない。図式の現働化の場面で他者の身体がどのように関わるのかは、その行為の種別、身体化の程度や形式、その行為に付帯する条件に応じて変わってくるからである。

「身体化された性向」のある部分は、他者の介在がない場面でも現働化し、一人きりでもそれにふさわしい行動を取ることができる（一人でできる）。しかし、ある領域の行動は、連動的にふるまう他者の現れを条件として再現される（一人ではできない）。私たちは、ひとたび「字を書く」ことを覚えてしまえば、その後は誰かの助けを借りなくても、一人で手紙を書いたり、ノートを取ったりすることができる。しかし、例えば、あるパートナーとならきれいに踊れるのに、他の相手になるとうまく踊ることができなくなるとか、あるチームの中ですぐれたプレーを見せていたスポーツ選手が、別のチームに移ったとたん凡庸な動きしかできなくなってしまう場合もある。つまり、私たちの能力は、ある部分については相対的に自立化し、また別の部分については強く関係依存的なままにとどまる。その後者の領域では、身体化された図式の現働化が、連動する他者の身体の働きかけを通じてはじめて可能になるのである。

そして、この「現働化」の過程は、すでにあるものをただ呼び起こすにとどまらず、しばしば新たな学習の機会となる。「できる」ようになるということが他者の身体の「なぞり」によって可能になるのだとすれば、その後の相互行為場面においても、各身体は（潜在的には常に）他者の身体の「なぞり直し」の可能性に開かれている。そのことは、ある種の「図式」の現働化の過程を説明するとともに、新たな行動様式の獲得（新しい性向体系の獲得）の可能性を示唆するものでもある。構造化された構造としてのハビトゥスが、なぜ、新たな環境の中で「変容」しうるのか。それは、ハビトゥスの形成過程それ自体が相互身体的な運動関係の中にあり、したがってまたその後も、他者の身体の「なぞり直し」の中で「再び学ぶ」可能性に開かれているからだ、と考えることができる。

9. 感覚の学び直し、あるいは共鳴的現働化の持続

ハビトゥスは、さまざまな位相において「共鳴」の可能性に開かれている。そのように考えることをうながす場面は数多くある。例えば、「味覚」の関係依存的な性格を考えてみよう。

以前ある人たちと一緒に通っていたころは「とてもおいしい」と感じられたレストランの料理が、ほかの人たちと一緒にに行くようになって「なんだかおいしくない」と感じられる。昔はワインなどどれを飲んでも同じだとしか感じられなかったのに、ワイン通の友人と一緒に飲んでいると、微細な味や香り、舌触りや重さを感じ取れるようになる。しかし、いつでもそれが分かるようになるわけではなく、別の場所で一人になるとどれも似たようなものだとしか思えないこともある。

こうした「感覚」のおぼつかなさ、私たちの身体がいかに関係依存的な形で「対象」ととらえているかを示している。その振れ幅のすべてが、他者の身体との「共鳴」の効果であるとは言えない

いとしても、誰と、どのような関係の中で「食べる」「飲む」かによって、「味わい」が変わることは間違いない。私たちは他者の身体的反応を参照し、時にはこれを模倣し、自分の身に引き移すことによって、「感じ方（味わい方）」を学び、かつそれを修正していく。目の前でおいしそうに食べる人が現れることが、それをおいしく感じさせる力をもつ¹⁴。

ところで、ブルデューによれば、味わい分けることができるということは、まさに「ハビトゥス」の作動に関わることであった。繊細な味が分かるということ。それは出自の生活環境の中で形成され、身体化され、その後のさまざまな実践場面（食に関わる場面）での「卓越化」に関わる「身体化された文化資本」である。そのような文化資本の伝承（味覚図式の獲得）は、ある部分まで、共に食べることを経験してきた身体と身体の共鳴にもとづいている。と同時に、その図式（味わい方）が特定の行為文脈において現働化されるかどうか、その場に現れる他者の身体（誰が何を、どんな風に食べているのか）に応じて変わってくる。私たちはしばしば、そのような共振関係の中で「感覚図式」の現働化を行う。つまり、共鳴的に世界を感じ取るのである。

もちろん、この認識だけで、身体的感覚の揺れ動きという複雑なプロセスのすべてが説明できるわけではない。しかし、ひとつの重要なファクターとして他者の身体の現れを考慮しなければならないということまでは、確認されたのではないだろうか。この視点に立てば、ライールがとらえようとした複数の性向体系を身体化した行為者とは、異なるモードをもって現れる他者に対して、それぞれに異なる「なぞり方」をもって応じることのできる存在のありようを指していることになる。他者の身体的な構えに呼応する複数の共鳴の様式を準備している行為者。そこに「複数の人間」の姿を見ることができるといえる。

10. おわりに——現在の文脈と身体化された過去

ここまでの考察は、性向の現働化に関するライールの議論を引き継ぎ、相互作用場面において諸個人が何ごとかを行う過程をより微分的な形で記述するための準備作業である。『複数の人間』に示された認識枠組みにつけ加えることのできるものは、ごくささやかな知見である。それは、ライールが「文脈の実践的類推」と呼んだプロセスの中に、身体の相互的共鳴（なぞりあい、巻き込みあい）とでも言うべき次元があるということ、この一点に尽きている。しかし、これを確認することによって、私たちはまず「行為の文脈」の成り立ちについて、少しだけ新たな見方を得ることができよう。また、行為者が身体化している過去の経験（性向や図式、あるいはハビトゥス）の存立の様態を、ブルデューやライールよりもさらに「関係的」なものとする地点に導かれることになる。

文脈はいかに構成され、これとの関わりにおいて性向はいかに現働化するのか。もちろんそれは、

¹⁴ この点は、佐藤義之（2014）が示した「態勢」の引き移しという考え方を採用してもまた説明することができる。佐藤が示した身体的相互性に関する議論との突き合せについては、また稿を改めたいと思う。

「文脈」という言葉の定義によって変わってくる。ある行為が行われる場面において、その行為に関与する有意味な要素の総体を文脈と呼ぶのであれば、そこにどのような他者が、どのような身体性をもって現れるのかということも、その重要な構成要素のひとつとなる。しかし、このような包括的な定義では逆に文脈概念が空洞化してしまうと考えて、例えば、文脈を行為者が認知的に構成している状況の定義とこれにともなう行為規範からなるものと見るのであれば、他者の身体は必ずしもその一部をなすわけではない。場合によっては、文脈の一貫性を混乱させる要因と見なすことができるかもしれない。例えば、「標準語」でしゃべり続けることが適切であるような文脈で、方言を使う他者が現れてしまうような場面では、他者の身体は「攪乱要因」として記述する方が適切であるように思われる。

いずれにせよ重要なことは、文脈という言葉で括られうるものの中に、相矛盾する構成力が働きうるということであり、また、文脈に関する「認識」が自動的にある種の性向の現働化を呼び起こすわけではないということである。行為の文脈は、そこに現れ、互いに交わる身体に媒介されながら、それぞれの個人が身体化した図式を活性化させていく。その身体的相互作用は時に、文脈の一貫性を混乱させ、その「状況」に対して不適切な身体（身体化された性向）を露出させるかもしれない。複数の文脈を横断する、複数の身体性を備えた諸個人の社会学（これが、ライール社会学の射程である）を志向するのであれば、この両者の関係を仲介する「他者の身体」に照準化することもまた求められるはずである。

そして、この他者の身体の現れに「感応」し「応答」するものとして自己の身体をとらえ、身体相互の共鳴関係の中で性向の現働化も可能になるのだと考えるならば、それは「潜在的な能力や技術」としてどこかに「ストック」され、「持ち運ぶことができる」ものであると言うよりも、継続的または断続的な学び直しの中でそのつど立ち現れるものと見る方がより適切である。それは、行為者の過去の履歴・身体化された経験の重みを軽視するということではない。現在の文脈とそこでの相互身体的な関わりの中で、何を表出することができるのかは、かなり強い形で「過去の経験」とその「身体化」のあり方に制約されている。「私」はそうにして「過去の経験の重さ」を引きずりながら、しかし、常にまたすでに、他者の身体に開かれた形で相互行為の場面に立つのである。

【参考文献】

- Выготский, Л. С. 1935 Умственное развитие ребенка в процессе обучения. (土井捷三・神谷栄司訳, 『発達最近接領域』の理論, 三学出版, 2003年)
- Bourdieu, Pierre 1980 *Le Sens pratique*, Minuit. (今村仁司他訳, 『実践感覚(1・2)』, みすず書房, 1988, 1990年)
- 1986 The Forms of Capital, in John G. Richardson(ed.), *Handbook of Theory and Research for the Sociology of Education*, Greenwood Press.
- 2000 *Esquisse d'une théorie de la pratique*, Seuil.

- Engeström, Yrjö 1987 *Learning by Expanding, An activity-theoretical approach to developmental research*, Orienta-Konsultit. (山住勝広他訳, 『拡張による学習 活動理論からのアプローチ』, 新曜社, 1999年)
- Holzman, Lois 2009 *Vygotsky at work and play*, Routledge. (茂呂雄二訳『遊ぶヴィゴツキー 生成の心理学へ』, 新曜社, 2014年)
- 石黒広昭 (編著) 2004 『社会文化的アプローチの実際 学習活動の理解と変革のエスノグラフィー』, 北大路書房
- 香川秀太 2008 『『複数の文脈を横断する学習』への活動理論的アプローチ——学習転移論から文脈横断論への変異と差異』, 『心理学評論』54 (4), 心理学評論刊行会
- 2011 「状況論の拡大: 状況的学習, 文脈横断, そして共同体間の『境界』を問う議論へ」, 『認知科学』, 18 (4), 日本認知科学会
- 鯨岡 峻 1997 『原初的コミュニケーションの諸相』, ミネルヴァ書房
- Lahire, Bernard 1995 *Tableaux de familles, Heures et malheurs scolaires en milieux populaires*, Gallimard Seuil.
- 1998 *L'Homme pluriel, Les Ressorts de l'action*. Nathan. (鈴木智之訳『複数の人間 行為のさまざまな原動力』, 法政大学出版局, 2013年)
- 2012 *Monde pluriel, Penser l'unité des sciences sociales*, Seuil.
- (sous la direction de) 1999 *Le Travail sociologique de Pierre Bourdieu, Dette et critiques*, La Découverte.
- Lave, Jean 1988 *Cognition in Practice, Mind, Mathematics and Culture*, Cambridge University Press. (無藤隆・山下清美・中野茂・中村美代子訳『日常生活の認知行動 人は日常生活でどう計算し, 実践するか』, 新曜社, 1995年)
- Lave, Jean & Wenger, Etienne 1991 *Situated Learning, Legitimate Peripheral Participation*, Cambridge University Press. (佐伯胖訳『状況に埋め込まれた学習 正統的周辺参加』, 産業図書, 1993年)
- 正高信男 1993 『0歳児がことばを獲得するとき 行動学からのアプローチ』, 中公新書
- 2001 『子どもはことばをからだで覚える メロディーから意味の世界へ』, 中公新書
- 村井重樹 2004 「習慣と行為 ブルデューとミードの観点から」, 『現代社会理論研究』14号, 日本社会学理論学会
- 2010 「諸個人のハビトゥス 複数の諸性向と文化的実践」, 『年報社会学論集』25号, 関東社会学会
- 2012 「ハビトゥス論の現代的課題 集団から個人へ, あるいは統一性から多元性へ」, 『哲学』128号, 三田哲学会
- 茂呂雄二他 (編) 2012 『状況と活動の心理学 コンセプト・方法・実践』, 新曜社
- 無藤 隆 1997 『協同するからだことば 幼児の相互交渉の質的分析』, 金子書房
- 岡田美智男 2012 『弱いロボット』, 医学書院
- 2013 「人とロボットとの生態学的コミュニケーション」, 河野哲也 (編) 『知の生態学的転回 3

- 倫理 人類のアフォーダンス』, 東京大学出版会
- 佐藤義之 2014 『「態勢」の哲学 知覚における身体と生』, 勁草書房
- 鈴木智之 2007 「複数のハビトゥス P. ブルデューからB. ライールへ」, 山岸健編『社会学の饗宴Ⅱ』,
三和書籍
- やまだようこ 2010 『やまだようこ著作集 第1巻 ことばの前のことば うたうコミュニケーション』,
新曜社